

平成16年度

中城湾港泡瀬地区環境保全・創造検討委員会
第2回 比屋根湿地・泡瀬地区海岸整備専門部会資料

野鳥園先進地視察結果

平成17年3月7日

内閣府沖縄総合事務局開発建設部
沖縄県土木建築部
沖縄市東部海浜開発局
(財)港湾空間高度化環境研究センター

1. 都立葛西臨海公園（鳥類園）

1.1 視察日時・場所

(1) 日時

平成16年12月22日（水） 10:00～12:30

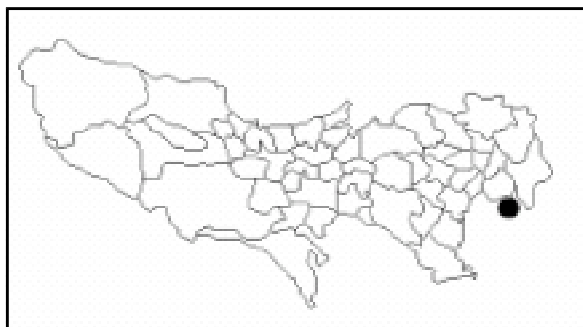
(2) 視察場所

都立葛西臨海公園（鳥類園）

1.2 施設概要

(1) 所在地

東京都江戸川区



施設の位置（東京都）



都立葛西臨海公園全景

(2) 施設目的

東京湾岸の自然環境保全に向け策定した「海上公園構想」を踏まえ、昭和47年より葛西沖開発土地区画整理事業の中で葛西臨海公園の造成は実施されている。臨海部の自然環境（干潟等）を取り入れ、淡水池、汽水池及び樹林を人工的に造成し、かつての葛西沖のような豊かな自然環境の創出に努めるべく整備した公園（鳥類園）である。

(3) 整備年月

平成元年（1989年）一部開園

平成6年（1994年）4月鳥類園ゾーンオープン

(4) 施設整備状況

面積：鳥類園ゾーン（27ha）、葛西臨海公園（79.6ha）、葛西海浜公園（411.7ha）

ウォチングセンター：

1階：レクチャールーム、会議室、控え室、機械室、トイレ、広場、案内・情報板

2階：観察広場、売店、展示室、事務室、身障者用スロープ

簡易建築物：観察舎2基、観察壁8基、休憩舎1基、野外トイレ、水門

自然観察路：自然観察路

その他公園施設：駐車場（公園全体のもの）

(5) 管理運営

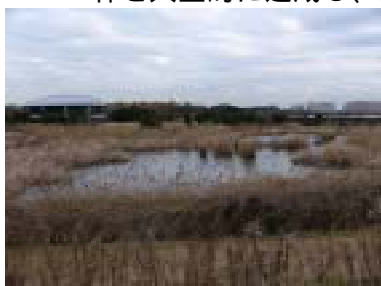
管理は東京都建設局により行われている。

1.3 視察結果

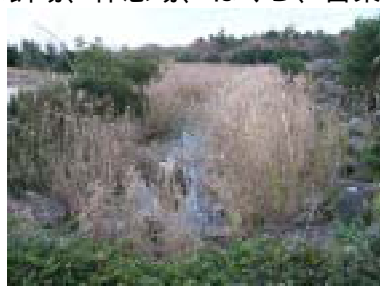
(1)野鳥等の生息環境の創出

【環境及び利用への工夫・配慮】

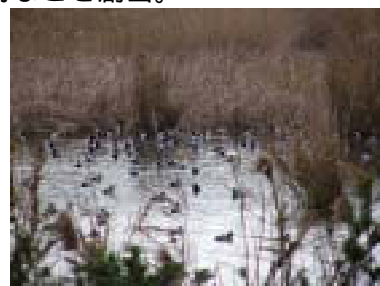
- ・園内は野鳥の生息に配慮した整備内容となっており、淡水池・汽水池及び広大な樹林を人工的に造成し、採餌場、休息場、ねぐら、営巣場などを創出。



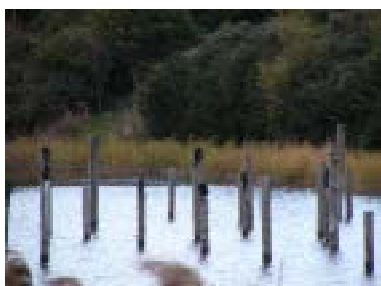
湖面のカモ類（休息場）



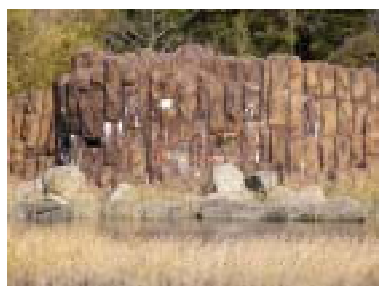
滝筋でアオサギが採餌



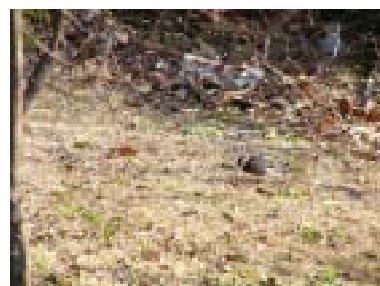
ヨシ原はバン等のねぐら・営巣場



杭上のカワウ（休息場）



大きな岩壁を配置(休息場)



植栽は陸鳥の餌となる種を選定

- ・鳥類相は、一年を通じてよく見られるものはサギ類、セキレイ類、クイナ類、カモメ類、猛禽類、カワセミ、カワウ、オナガ等。セイタカシギのような珍鳥も姿を見せる。春や秋は渡りの季節でシギ・チドリ類、ヒタキ、カラ、ホオジロ類等多彩。夏は鳥の子育てが見られコアジサシ、ヨシゴイ、オオヨシキリが数多く見られる。冬はカモ類、ツリスガラ、オオジュリン、ツグミ等が多く見られ、スズガモ、カンムリカイツブリの大群が見られる。
- ・種類は年によって変動があり、今年はホシハジロ（カモ類）が極端に多かった。
- ・今年（2004年）の渡りではホシハジロが2,000～3,000羽であった。
- ・カルガモは別の池に行っていることが確認された。
- ・渡り鳥の個体数・種類の年変動については園内の環境によるのか、繁殖地（ロシア等）での影響によるのかはわからない。
- ・カワウに関しては増えすぎている（漁業関係者からも苦情がきている）。以前は数も少なく希少種であったが、繁殖地の拡大（保護区の拡大）によって多く見られるようになった。
- ・週に一度園内をまわって種類を把握しているが、マッピング等を行っていない。野鳥愛好者の情報などから園内に定着している種の大体の居場所は特定できており、今度ボランティアが中心になって土手をつくり、カワセミの営巣を誘導する計画を立てている。今までにオオバン・チュウヒがヨシ原で繁殖したのを確認している。

- ・園内の池では釣りを禁止しており、また池の周辺はヨシ原や植栽によって釣り人が簡単に水際に近づけない構造で設計されている。
- ・透筋は夏場の渇水期にも水が残るように配慮して設計（採餌場所の確保）
- ・野鳥園および周辺の植生は陸鳥の餌場となるように選定している（外来種含む）。



植栽は水辺に近づけないよう工夫

野鳥園及び周辺の植生（例）

木本類の例	草本類の例
クコ、シモツケ、スイカズラ、キョウチクトウ、テイカカズラ、ハコネウツギ、アメリカデイゴ、アベリア、ブッドレア、フヨウ、キンモクセイ、ソメイヨシノ、ナワシログミ、ハマビワ、ソヨゴ、モチノキ、ザクロ、ピラカンサ、サンゴジュ、ヤマボウシ、アラカシ、クヌギ、マテバシイ、シラカシ、コナラ	シロツメクサ、カタバミ、メマツヨイグサ、コマツヨイグサ、オオアレチノギク、ノゲシ、アキノノゲシ、ククイモ、ブタナ、コセンダングサ、ヒメジョオン、セイヨウタンポポ、ヨモギ、イタドリ、イヌホオズキ、イノコズチ、ヨウシュヤマゴボウ、コニシキソウ、ツククサ、タマスダレ、ツワブキ、イソギク、ヤブガラシ、ヘクソガズラ

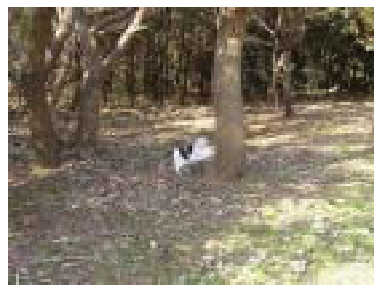
出典：「葛西臨海公園 鳥類園かわら版（2004年11月号）」より

【問題・課題】

- ・池や干潟ではヨシの生育範囲が広がり、陸地化の進行が心配されている。ヨシの刈り取りは、機械の出入りができない状況のため、ボランティアの力を借りて手作業で実施しているが、範囲が広く大変である。
- ・池の水源は公園内の降雨のみで、水量確保が難しい。
- ・池では釣りは禁止しており、今のところブラックバスやブルーギルはまだ入っていないが、カダヤシやアカミミガメは確認されている（移入種の問題）。
- ・捨て猫が多いが、特に周囲を柵で囲うことはやっていない。野犬も侵入があるが、柵をしても犬の場合は柵の下の地面を掘って侵入する。これまで犬猫による野鳥への被害（捕食）は確認されていない。猫へは一般市民によってキャットフードの供給もあり、排除は難しい。よって現在では野猫に避妊手術を行い、園内での繁殖を防止している。



ヨシの刈り取り



園内に住みついたノネコ

(2)施設内容及び運営・管理について

【環境及び利用への工夫・配慮】

- ・都から委託を受けたNPO（生態教育センター）のメンバーが園内を案内してくれる。また、同NPOは土曜・日曜・祝日の運営や環境管理作業を受け持っている。
- ・観察窓や観察版などが設けられている。観察版は、大人から子供まで身長を考慮して窓の位置を工夫している。



NPOメンバーによる案内



野鳥の観察風景



観察小屋

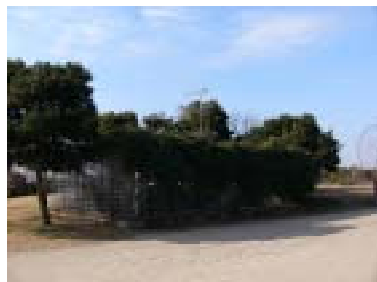


観察版(窓の位置を工夫)

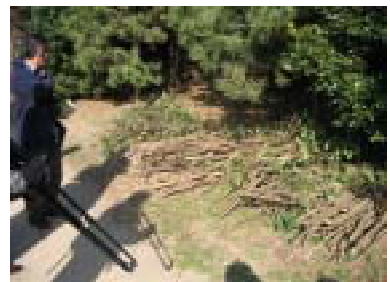
- ・園内施設は自然に調和した外観や植栽で配慮している。
- ・園内ではカラスは少ないが、一応ゴミ箱には蓋をつけて対策している。
- ・維持管理における伐採樹木は園内で処理している。
- ・ヨシはかなりの頻度で刈り取りを行なうが、鳥類の繁殖期間中は行なわない(春季)。
- ・池の水質浄化対策は特に実施していないが、水門を上げて下層にたまった汚泥を流したりはする。水量は乏しく通常は水門は閉じている。



照明は光が漏れないよう工夫



配電施設



伐採樹木は園内で処理



岩壁風の観察小屋



ゴミ箱



少し開放し下層の汚泥を流出

【問題・課題】

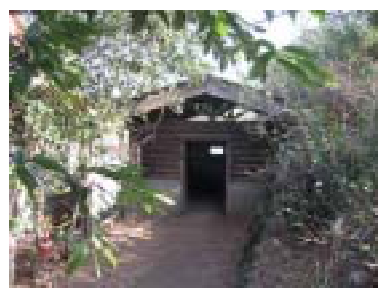
- ・ 観察小屋前の窓は前面の草刈を頻繁に行なわないといけない（ボランティアに協力してもらう等）。
- ・ 観察窓前にいろいろな環境を創出して（湿地・水鳥・陸鳥）さまざまな鳥を見せようとしているが、樹林性の鳥を見せるにはただ樹木を植えるだけではなく、野鳥を頻繁に確認できるように水場を造ったり常時餌となる植物を植える等の工夫が必要。
- ・ 園内で観察できる鳥の案内板は設置した当時から変わってないが、園内の環境の変化とともに種類も変化するのでできれば10年スパンで内容が変わるようにしたほうがいい。
- ・ 観察小屋には浮浪者が住み着いている。



観察窓から見える風景



鳥類案内版



観察小屋の入口付近

- ・ 石造りの園路だとコケが生えるので滑りやすい。他の事例では上に網をかぶせるなどの工夫がある。
- ・ 周辺住民(集合住宅など)から今現在は特に苦情はないが、設置してある望遠鏡は上を向けられないように工夫してある（覗き防止）。

- ・ 湿地はどんどん陸地化するので、ヨシの刈り取りは根っこも取るようにしなければならず管理が大変。ここ10年間は毎年陸地化が進行している。田んぼのようにトラクターを入れて管理できればいい(トラクターが湿地内に入れるよう設計を工夫すべきであったが、周囲は囲まれており機械の出入りができない状態である)。



ヨシの刈り取り後

- ・ 池の水位を上げてヨシの育成を防ごうとしたが（現在水深は1m程度）、水門がこれ以上上がらず現在の水深以上には調節できなかった（水門による水深調節のための設計を工夫したほうがよい）。
- ・ 台風後は特に倒木の片付けが必要になる。
- ・ 管理道路と園路が一緒になってしまうと危険（管理車両と利用者の往来等）できれば分けたほうがよい。
- ・ 維持管理の予算確保に苦慮しており年々削減されている。



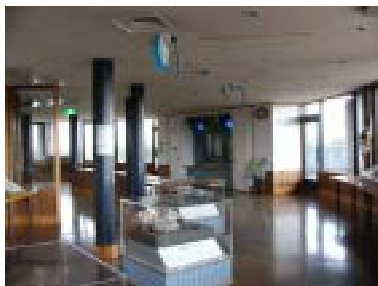
(3)ウォッチングセンターについて

【環境及び利用への工夫・配慮】

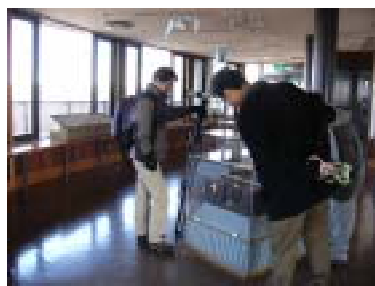
- ・鳥類園には、一般利用者や学校等団体が観察・学習できるウォッチングセンター（2階建て）があり、自然体験や環境学習の拠点となっている。映像やパネルによる展示が楽しめるほか双眼鏡による野鳥の観察ができる。
- ・2階の展示室や展望広場からは、鳥類園内の「上の池」と「下の池」及び「東なぎさ」を見渡せる。



ウォッチングセンターの外観



展示室



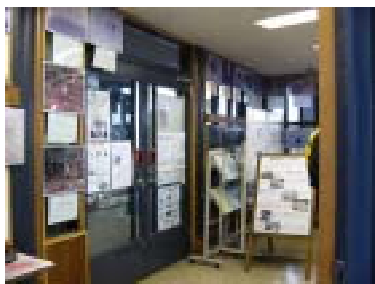
左は観察展望窓（展示室内）



自然のジオラマ



視聴覚コーナー

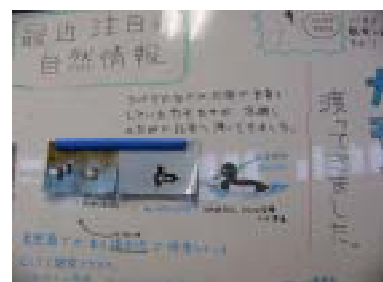


情報コーナー（掲示板等）



レクチャールーム

- ・NPOのメンバーが鳥類の生息状況調査を週1回程度で実施しており、確認個体数の概算や、また公園利用者からの報告によって確認種、希少種の把握を行っている。情報はウォッチングセンター内の情報コーナーに掲示されており、その他に情報誌発行及びホームページへ掲載し、お知らせしている。



【問題・課題】

- ・学校などの団体は雨天時の対応を心配する。レクチャールームの利用などで対応している。

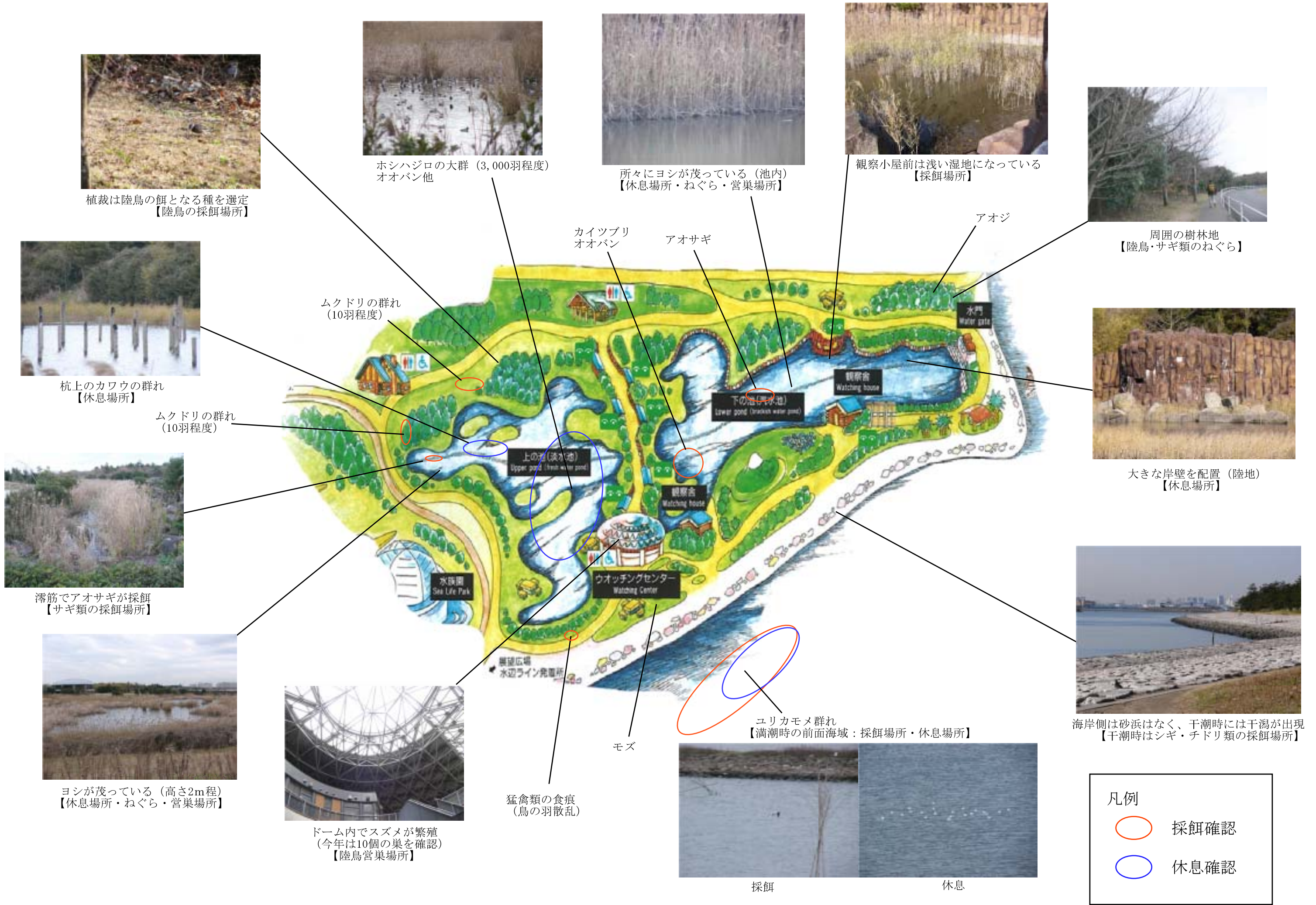


図1 生物確認状況および生息環境状況(葛西臨海公園(鳥類園))



- 凡例
- シギ・チドリ類の採餌場所（干潮時）
 - 猛禽類の採餌場所
 - アジサシの休息場所

【人工渚】
一度は砂を入れたが流されてしまった。
現在、東なぎさは人の立ち入りは禁止（保護区域）。
雑草が茂っており砂礫地ではない。
アジサシは休息場所として利用。
営巣は確認されていない。

【園内湿地・池】
シギ・チドリ類
悪天候時の避難場所

【陸域】
オオタカ・チュウヒ
ハヤブサ・チョウゲンボウ
の採餌場所

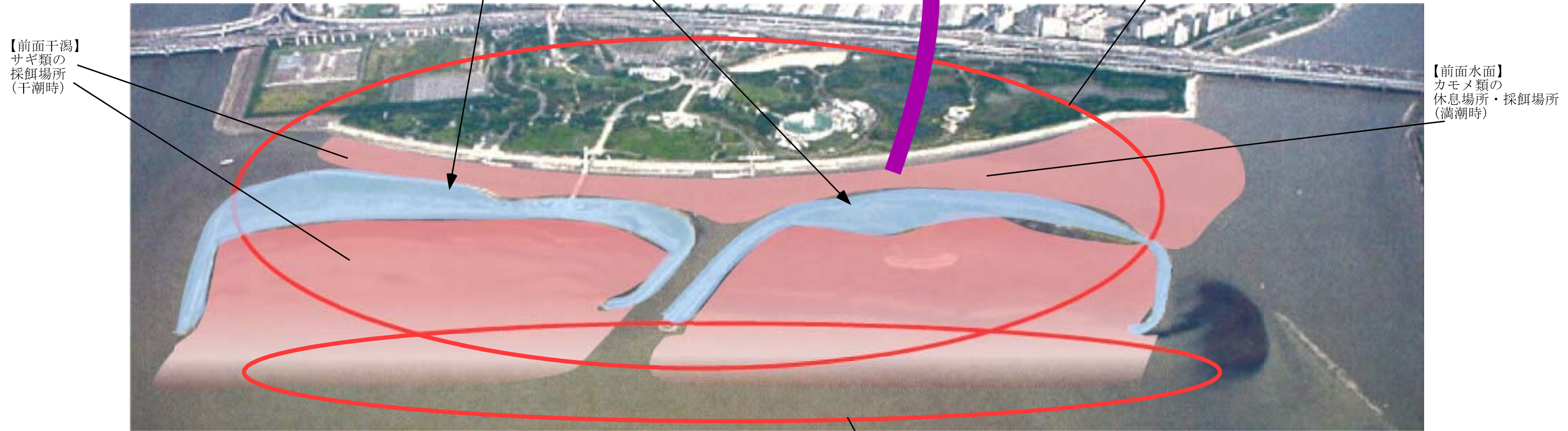


図2 園内での野鳥の利用状況（葛西臨海公園（鳥類園））